

a Swallow-made  
Chronic Rain



雨燕と時知雨



# 目次

雨燕と時知雨	
— prologue —	3
<b>TheOrigin</b> —君を待つ世界—	5
———消えゆく少年	7
序 —触らぬ神に祟りなし—	10
破 —闇夜にカラス—	15
.....	17
.....	20
.....	24
急 —ツバメが低く飛ぶと雨が降る—	26
.....	29
— epilogue —	32
* 奥付 *	35



雨燕と時知雨



— prologue —

Why not kill?

....I'd like to.



闇夜にかぼそく隠れる昏い雨雲。古のカラクリ大蛇の胎内で。  
嘲る笑顔の少年が、その金色の片眼から、不意に一筋の涙を落した。  
「俺は多分、あんたと……一緒に、いたかったんだ」

やっと想いを声にした少年に、赤い髪のは娘は、絞り出すように答える。  
「それは……アナタの世界の私に、ちゃんと、伝えて」  
この少年とは、出会ってはいけなかった。それをわかっているながらも、ここまで来てしまった娘は、全身全霊の真心で応える。  
「……待っているから。どこにいても私は……アナタのこと」

少年は、これまでの怜悧さが嘘のようにぎこちなく微笑む。  
「それは……無理だよ」  
とても幸せそうな声が、拙い希みの全てを拒絶した。  
「——だって……オレは——……」

永い約束の黒い翼が少年を包む。果てしない慟哭へとやがて誘う——

Cx if

-a Swallow-made Chronic Rain-



TheOrigin 一君を待つ世界一



雨が降るといつも鶯<sup>つぐみ</sup>は、その少年のことを思い出した。  
「.....ウソ。あれからもう二年？」  
年末に十六歳の誕生日を迎えたばかりの鶯は、その頃と変わらない短く赤い髪をかき上げた。鶯色の小袖がかすめる大きな黒い目を閉じる。

瞼の裏に浮かぶ、二つの顔を持っていた少年。金色の髪に紫の目、銀色の髪に青い目。  
少年がこの「花の御所」に居候していた頃、最後に話した言葉を思い出す。  
——誰にも会う気はなかったけど.....ツグミに会いたかった。  
白い小袖に紫の袴が合う、金色の髪の少年ユーオン。淡い笑顔が似合い、剣も力も弱小だが、時に無情な銀色の髪の少年へ変貌することがあった。  
その身軽な黒衣の「銀色」——キラは、聴き取れない一言を残して去った。  
——俺はあんたのこと.....——だと思う。

「キラもユーオンも、雨がよく似合うバカだったっけ.....」

ユーオンは鶇の父の弟子で、居候をやめるまでは剣を習っていた。  
キラの方は稀にしか現れず、それは大切な何かを命を削ってでも守る時だけで、その  
ため少年本来の優しさを、ことごとく殺す苛烈さだった。  
「バカだから……もうとっくに、削り切っちゃってるんだらうけど」  
失踪したその少年は、術師である鶇が占っても、悪い卦しか出ず……。

今も鶇は雨が降ると、無意識にその姿を探す。  
常世に消えゆく背中に、思わず、待っていると告げた約束を思いながら。

\*

—————消えゆく少年

青い空は、何もかもを呑み込む冷たい光だと、いつか誰かが彼に言った。  
命を終えた体は土に還る。眠れる心は夜空の星と散る。想いを刻む魂は風に舞う灰となる。

もしもこの空の果てに、「天国」があるのならば。ばらばらになった命は穢れを捨てて、己の元の姿に辿り着けるのだろうか。

罪も涙も、意味も希望も。全ての痛みから解き放たれて。



己より清らかな命の未来を摘むのは、きっと気持ちの良いことだろう。ヒトが切り花を飾ることを好み、乙女の春を奪って愉しむように。

運命とは、この手の中にあるもの。そう思い込めるほど、彼が強い化け物ならば問題はなかった。これから彼の身は、人世を穢す禍わざわいに変えられていくのだから。どれだけ彼が、帰りたいかとしても。

大空を泳ぐ蛇のような船の上で、座り込んでしまった彼の膝で。呼吸をせずに瞼を閉じて、動かなくなった少女の項垂れた真っ黒な頭。

こういった青い艶のある漆黒の髪を、鴉の濡れ羽というのだと習った。だから彼には、「黒い鳥」だった少女。彼が隠し持つ短刀を突き立てた、柔らかな心窩から流れ出る血も、さらりと横たわる羽を汚すことはない。

これでもう、彼の仕事は終わり。彼がここにいる意味は果たした。

元よりとっくに消えていたはずの命。自身で深く抉った首の傷から、短刀に向けて命が洩れ出し、急速に全身が冷えていくのを感じる。切り札の短刀を使う時に、先に己の喉を切って「力」を足したためだ。

息を吸おうとするとべたりと血が絡み、目の前が真っ暗に落ち込む。彼と黒い鳥を殺し合わせたのは、彼とは本来縁のない者達の都合だ。

あちら側では黒い鳥は、生け贄となっただけのこと。少女の青い濡れ羽を摘めと促す、「悪」の「神」を起こすために。

そう。少女を手にかけて彼は、これから「悪」という「神」になる。

少女から奪った黒い翼が彼の楚となる。彼だった少年の名を闇に隠して。

利用されたのは承知の上だ。この黒い翼に顕現する「神」といった存在は、魂のウィルスだと誰かが言っていた。

「神」は、その字を含む「精神」に似た存在で、全ての精神<sup>いしき</sup>あるヒトは「神」の器であり、触れてしまえば器に流れ込んでくる——祟るものが「神」なのだ。

もう、立ってられない足がへたれる。黒い鳥の少女から離れ、船の端で彼が暗い目に白の空を映すまで、彼にはとても、時間が長く感じられた。

彼がそのまま、へりの割れ目から蒼穹に吸い込まれるまで、駆け寄ろうとした者達が間に合わないほどの束の間。

ごめんなさい。倒れる背中が船から消える時、その一言だけを残した。

大空を往く船から落ちた彼を、誰も助けには来られなかった。船上はまだまだ戦いの嵐で、彼一人の終わりなど戦況を動かさしはしない。

それは「神」と「悪魔」が、互いに仕掛けた頂上戦だった。彼が過去に関わった事象のこじれも交え、この頂上戦前に彼は眠りについていた。

けれどまだ、目も醒め切らぬまま、大空に連れて来られた。それは「悪神」が、彼を欲していたからだ、とやがて知ることになる。

落ちていく彼の器は、侵されていく——憎悪と呼べるある者の鼓動と、生け贄の少女の黒い翼に。彼という心は何も感じなくなり、空の色も忘れて闇に沈められる。

もしもそこで、彼が何者でもないヒト殺しだったのならば。平和な地上にいた間に、彼と同じく「神」に囚われたものに出会っていなければ。

そのあだ花の視た夢が、彼を今更埋めなければ、彼はここから「天国」への梯子を知ることにはなかつただろう。

雨上がりの雲の隙間から、零れる光のように、手が差し出された。その手の主の、作り物の器に宿る、墮天使という悪魔が囁く。

おそらくそれは、空に往く前に彼の家だった、小さな一軒家の縁側で。

「……持っていて。君がどうなっても、『シグレ』くんを残すために」

彼がずっと、腕輪にしている携帯武器に、突然やってきた墮天使は余計な小玉を填めた。狐火玉というらしい形見は、光芒の墮天使が体現する「天気雨」の「力」だという。

その時の彼は眠っていた。だからどうして、見知らぬ墮天使がそんなことをするのかはわからなかった。

彼と同じように、闇に閉じ込められてしまった娘がいる。その「夜の娘」と、墮天使は同じ夢を視ていた。

たとえ彼がその娘を救わず、有り得ない夢に囚われるとわかっていても。

「でないと……あの子が……」

黒い翼に意識が沈む、彼には観えることはない。

あるのは胸を焼く赤い憎悪と、彼の身を呑み込んだ青い炎——<sup>大空</sup>

## 序 一触らぬ神に祟りなし一



甘ったるい感傷が毒の如く全身に流れ、銀色の髪の少年は目を覚ました。  
.....そう言えば、そんな世界もあった。  
それが何処であっても、帰る気のない彼には無意味な、束の間の夢。  
少年にとって、目覚めとはいつも、重苦しい吐き気との戦いでしかない。  
「おはよう、『時雨』。.....気分はどう？」  
彼を長旅へ連れ出した元凶の黒い髪と目の少女.....その無機質な幼声に、時を渡る彼の翼が、黒衣と晒で包む身の内でざわめく。

その黒い翼と銀色の髪の少年「時雨」は、様々な時空を渡る。  
今宵も神剣を手に、「神」を穢す妖や魔縁、破綻した「神」——秩序を乱す化け物を、数多の世界で見つけては狩る。  
奪った命は全て、少年を不滅とさせる「悪神」の翼が取り込んでいく。そのため絶えない汚泥を呑み下し、溜め込んでいく業苦を永遠に背負う。

「……気分とか、わかってるくせに。いつも通りサイテー、トウカ」

「そう。今日は、山科鶴のいい夢を見たようなのに、残念」

薄青い上着の黒衣の少女、橘桃花。耳を隠す黒髪を、石竹色のリボンで小さく括った短い尻尾髪の少女に、時雨は歪んだ微笑を浮かべる。

ここは世界の何処でもない。ただ、全ての世界の軸と言われる闇夜だ。

彼らの基地である蛇型の船は、それ自体も闇の一部で基本は動かないが、数多の世界に彼らを渡す連絡橋でもあった。

起き抜けによく嘔吐する時雨は、管制台の味気ない長椅子を寝床にする。

桃花はいつも離れた船室で寝ている。時雨の具合が特別に悪く、助けが必要な時を除いて。

「トウカは離れてても、ヒトの夢とかわかるわけ？ オレよりタチ悪いな」

「私のは何となく。意識して色々観れるアナタの方が、多分悪質」

彼らは互いに、現状を雑多に把握する特殊感覚を持つ者だ。素っ気ない桃花に、時雨は金色の目を細めて嗤いながら、どっちが。とだけ毒づいた。

薄暗い外を見ると、ぼつぼつと雨が降り出していた。

そんな光景が見えるということは、ここ最近時雨が所望していた世界に、やっと桃花は座標を合わせてくれたらしい。

時雨の存在の影響で雨を呼ぶ船は、この世界からは雨雲に見えるだろう。

時空を渡る雨の化身——神殺しの「時雨」が、今の彼の通り名だ。

かつての剣の師の娘、「鶴」が住む国「ジバング」のある世界。己が故郷と言える場所には、彼はとっくに背を向けたはずだった。

ある並行した時空——今まさにいるこの世界で、彼でありながら異なる「力」を受けた少年、「<sup>つばめ</sup>燕雨」の存在を知るまでは。

せっかく来た世界も、干渉するには時空の間隙を渡らなければならない。

それができるのは、時の闇を越える翼を持った時雨だけで、桃花は旅先でも留守番が多い。神殺しの任の際は、長くても一カ月はかからないが、今回は長期滞在と気付いているようで、ずっと不満げにしている。

冷氣漂う甲板から時雨は皮肉げに、子供のような体でも大人びた黒い少女を見返す。  
「.....何なら、あんたも一緒に降りる？」

希望する時は桃花も、見知らぬ世界へ共に連れて行く。例えばそこが、どんなに危険な土地であっても。

湿気た冷風に細い眉をひそめる桃花は、軽装の時雨——袖が無く胸元をはだける黒衣に、短いケープを羽織るだけの姿に溜め息をついた。

「——止めてほしいの？ .....時雨」

いつも全てを見透かすような桃花の、光彩無き混沌の黒い双眸。

これまで時雨は、彼自身の世界には決して寄り付かなかった。

けれど今、時空は違えど飛び立つ時雨に、桃花が静かに釘を刺してくる。

「アナタ、『悪神』に吞まれかかっている。自分とアレと.....願いの区別がついていない」

「.....へえ。そうなんだ？」

それは少しだけ意外な、彼の監視者たる桃花の珍しい懸念だった。

最も今の彼には、その意味はさっぱりわからなかったが。

切りつけるような酷寒の空で、短い銀色の髪が風に煽られる。「悪神」という「力」の具現を、時雨は黒い翼として広げる。

確かにどうして、ずっと避けていた世界に降り立つ気になったか、時雨自身もわからないでいた。

この時空にいる赤い髪の娘は、「時雨の知っている鶇」ではない。

そう大きな違いは無さそうだが、並行世界から来た時雨の干渉で歴史が大幅に改竄されれば、時空ごと消失する危険性もある。

「それだけ『悪いこと』だから.....『悪神』も、大喜びなんだろう？」

この翼から「力」を得る限り、「悪神」たれという制約が時雨にはある。己が名に反する神は不秩序として時雨が狩る、まさに討伐対象だからだ。

「.....時雨。今、喜んでいるのは、アナタ自身だけ」

神たる「力」を跳ね返せるほど、時雨自身に違う「力」があれば別だが、時雨はほとんど「悪神」に染まった。彼に有ったのは旧い神剣と狐火玉、それを飾る「刃の精霊」、そして「雨女」たる妖から奪った「雨」の加護だけだ。

それらの「力」が辛うじて、時雨と名乗る者の自我を、「悪神」とは分離して維持し続けていた。



だから桃花は、時雨と「悪神」の監視を続けているのだろう。  
時雨の義理の親戚として、彼が「悪神」に呑まれる末路を看取るために。

無表情に見送る桃花に振り返りはしない。ただ見ていただけの世界へと、初めて自ら飛び込んだ。光混じりの雲間を自由に墜ちていく。

ほどなく、その穏やかな匂いを知る。「ジパング」という国の空気は何と生温いものかと、時雨は時空の異質化を感じ取る。

自分のいた場所のことなど、時雨は覚えていなかった。  
彼に「悪神」が憑いた理由——神殺しと成った時、以前の自我は消えた。  
ここにいるのは時空を渡り、己の軌跡を辿った模倣者だけだ。

……淋しいか、と黒い少女は、最初に少年を見た時に尋ねた。  
「アナタの依り代は消えたの、シグレ」  
少年は何も答えられなかった。  
今まで在ったはずの心と記憶が消えて、自分が何者かわからなかった。  
「意識は残っているのね。良かった」  
そう、だからそれだけはわかった。少年は、置き去りにされたことを。  
「どうする？ 『悪神』になるか、わたしの言うことをきくか」  
黒い少女の声にかぶせて、少年の内からも「悪神」の甘言が響く。

——何で、殺さないの？

そして黒い少女は、少年を時渡りへと導く。  
「シグレを殺すか、『時雨』になるか……アナタの好きにすればいい」  
少年が拙い自我を手放し「悪神」となるか、今有る「力」で「時雨」となるか。これまでの生き様を自分で観て、選ぶための時の旅路。

長い旅の中、少年が、己の意識を保ちたい理由は見つからなかった。  
それなのに何故、あの赤い髪の娘の姿を再び観ただけで——それだけでもう一度、心を惹かれてしまったのだろうか？

願いはほぼ、一つだけと言って良かった。  
その身が「悪神」と化しても、少年自身に困ることはなかった。唯一、少年が自らに課した願いを、「悪神」は破るだろうこと以外は。

——……そんなに鵜が気になるのなら、無理やり奪ってしまえば？

黒い翼から「悪神」はずっと、耳を塞ぐ少年に囁き続ける。

——大切というのは、欲しいということ。欲しいなら、奪えばいいこと。

少年の願いは、赤い髪の娘が、こんな不穏な神殺しに関わらないこと。それが少年に、「悪神」に抗う「時雨」を選ばせた最大の理由だった。

それなのにこうして、鵜が住む国「ジパング」へ降り立った時雨は……いったいこれから、彼は何をしようというのだろうか？

「……ゾクゾク、するな。……我が事ながら……——」

時雨に浮かぶのは、彼自身にも不可解な、歪で冷たい微笑みだけだった。

\*

## 破 一闇夜にカラスー



欲しいものがあるなら、奪えばいいだけ。

とても簡単な原理だ。それを「悪いこと」と、気付いていない者も多い。

――……私の『力』が、欲しいの？ ……ユーオン君。

少年が「時雨」となるために、一番初めに手にかけた妖。今や数少ない純粋な血統の「雨女」は、金色の髪の少年ユーオンの知り合いと言えた。少年に従う「刃の精霊」が、ヒトとして生きていた頃の恋人だったのだ。

変わり果てた少年の銀色の髪に、哀しげに笑う雨女の姿は、今も時雨の金色の目に焼きついている。

「あんたは危険な『降刃』だから……それはもう、『雨女』じゃない」

表情一つ変えずに告げた少年に、雨女はそうよね、と納得して頷く。

「刃の精霊」は、雨女が妬心によって暴走させた「力」で殺された。

時の旅路でそれを知った少年は、「神」の類縁「妖」の破綻者の排除と、「悪神」が囁く

「悪いこと」の両方のために――

貴重な友人だった雨女を、「刃の精霊」に鋭くさせた神剣で貫いていた。

「.....オレがあんたをやれば、あんたは.....『刃』と、ずっと一緒だよ」  
それはいったい、誰が欲しいと思ひ、流れた血だったのだろう。

欲しければ奪う、これでいい。困るなら誰か、彼を殺せばいい。

独り醜く嗤う瘦軀は雨に隠され、翼を仕舞った時雨が現世に溶け入る。

行方不明の少年を思わせる雨夜に、「花の御所」の闇から、時雨は鶯の自室に突如押し入った。鶯は当然ながら、激しく驚いて振り返った。

「――え？ .....シグレ!？」

意味の違った旧い名を鶯が呼ぶので、鶯の姿も昔のままに観えた。その幻も束の間、涼やかな面立ちが鋭く、よりいっそう垢抜けた赤い髪の娘がいた。

少女から乙女に向かう匂やかな娘。再会の間など無視して細い肩を壁に押し付けた。焦がれ続けた息吹を全身を使って感じ取る。

「.....今は『時雨』だよ。.....久しぶり、ツグミ」

強迫な腕の下、変わり果てた少年の氷笑に、鶯が声を震わせて尋ねる。

「ずっと.....何処に行ってたの!？」

間近で薫る鶯に、彼の呼吸が止まったのは、欲情であるのだろうか？

――オレは.....ツグミを、墮としたい？

彼はむしろ鶯には、彼などに関わらず綺麗でいてほしかった。

だから黒い翼は、その花が綺麗な内に、早く手折ってしまえと衝迫する。

鶯の後ろ髪からおとがい顔へ、僅かに上向かせるように悪戯な指を這わせる。

「.....――もっとツグミのこと――.....みせて.....」

そのまま額を寄せると、鶯は恥じらいで強張りながらも、瞳を侵す彼を無言で凜と見返してきた。

そうして、自身のことを語ろうとしない時雨を、力の限りはたいていた。

.....心から怒っている鶯の黒い目は、それ以上の心配に満ちていた。

強い靈感を持つ呪術師の鶯は、本当に彼を拒むなら祓うこともできる。

頬を打った鶯の手からは温かさだけが伝わり、彼の闇を白夜へと戻す。

鶯の傍はやはり.....ただ、心地が良かった。

この世界の三年前には、時雨本来の時空とは違う温かな時間があった。  
まず目にしたのは、金色の髪の少年と赤い髪の娘の些細な日常――

ジパングは京都の管理要所地、「花の御所」の一角で。  
質素で広い道場に、景気良い竹刀の音が響いていた。  
「オマエ本当に、変わんねーなあ。何て鮮やかな負けっぷりだ」  
そこには御所の侍の筆頭であるガタイの良い男、山科幻次と、その元に剣を習いに通う、金色の髪で尖った耳の少年がいた。

「……オレ、竹刀から卒業できる日は来るのかな」  
弟子入りしてもう一年を越えるのに、一向に上達の様子を見せない者に、師匠が思わず苦い顔で尋ねる。  
「何か目標とかはあるか？ ユーオン」  
「？」  
「オマエに足りないのは、やる気にしか見えねえ。強くなりたいのは本当みたいだが、何かこう、必死さが足りないっつーかな」  
そう言いながら師匠は、この弟子特有の注意事項も忘れなかった。  
『『銀色』みたく、必死過ぎて容赦ないのも駄目だからな』  
「……はえ」

そうして道場を出て行った師匠を、平和な無表情で見送るが――  
「目標……かあ……」  
その後ろ姿に、必死に隙を探してみるが、今日も見つかることはない。

「ゲンジって……どうやったら倒せると思う？ ツグミ」  
「……は？」

道場の雑巾がけが終わり、隣の釣殿で鯉を眺めていた少年に、お疲れとお茶を持ってきてくれた赤い髪の娘が絶句する。  
娘――山科鶴の父の弟子にあたるユーオンが、よりによって実の子供に、実父の打倒法をきくのだから。

本当に悩んでいるようなユーオンに、鶯は尚更不思議そうにする。  
「父上を倒してどうするのよ？ ユーオン」  
「うーん……ゲンジは多分、少なくともそうしないと、オレのこと認めてくれないと思うんだ」  
「父上はもう十分、ユーオンのこと、買ってると思うけど？」  
弱小さはともかく、父がたまに飲みになどつれていくユーオンについて、その気安さは傍から見ても微笑ましいと密かに評判だった。

「ツグミと一緒にいたければ、いつかはゲンジを倒さなきゃいけないよな」  
がちゃんと派手に湯呑茶碗を揺らし、隣で鶯が引っくり返りかけた。  
「もちろんそれだけじゃ駄目だけど……あれ、ツグミ？」  
どうしたんだ？ と、それまでずっと悩み顔だったユーオンが、両手で幸せそうにお茶を抱えて平和に笑った。

次の出来事も時雨の時空には無い光景。銀色の髪の少年の三年前のこと。

久しぶりに、京都とその周辺に、雨が降っていた時節だった。  
「……ん？ ユーオン……でなく、キラか？」  
暗い空を縁側で見上げていた少年が、不意に銀色の髪へと変わる。  
庭に出て何を思ったか、柵代わりの植え込みをひらりと飛び越えていた。  
「何処行くんよ？ おーい……！」  
苛烈なヒト殺し、「銀色」の独走に珍しく焦る兄貴分の焔けいの声も届かず、少年はそのまま雨の中を往く。

どうしてそこに行こうと思ったか、少年はわからないまま早足に歩く。  
少し前に居候していた「花の御所」。戦うことしか知らない少年には、雲の上と言っていい華やかな鳥籠。  
ただそこにいる赤い小鳥が、ふっと青い目の奥をよぎっただけで。

ますます強くなる雨脚に打たれながら、思っていることは単純だった。  
——これなら……会えるまで、もつかな。  
普段はこんなに長く、命を削る「銀色」でいることはできない。けれど水の眷属に近い化け物の少年は、この雨の中でなら己を保てる。

少年は何も問題を感じなかったが、雨の滴る冷たい体で御所の扉の裏に立った時、近い部屋にいる者の驚きは大きかった。

「……って——……えっ、キラ……!?!」

誰の目にも触れず、白雨に溶け込む少年に気付いた鶯は、慌てて無言の来訪者を屋内へ引き入れたのだった。

「もう、こんなにずぶ濡れでいきなりどうしたの!? キラ！」

板の間に座らせた銀色の髪の少年、キラの体を手拭いでわしゃわしゃと拭きながら、鶯はとにかく心配していることをキラは感じ取る。

「何か用があるなら、炯君づてに言ってくれば私から行くのに」

力の消耗が激しく、滅多に現れない「銀色」が何故ここまで来たか。

キラ自身も理由がよくわからず、黙って座り込む。

怒り顔の鶯は、ただ心配しているのだと、キラの目には真心だけが映る。

「こら、逃げない! まだ全然乾いてないでしょう！」

「……——」

ヒトに触れると、キラは持ち前の特殊感覚——「直観」で、相手の深い何かを感じてしまう。しかし鶯の力強い手からは、温かさだけが伝わる。

強気の中に優しさが詰まる声も、動揺を殊更掲げない黒い瞳も——

鶯の隣は心地良いらしい……それだけをキラは自覚する。

気が付けばじっと、手拭いの中から、キラは鶯を見上げていた。

「……キラ？」

「……鶯に会いたかった」

——え? と、やっと口を開いたキラを見つめる鶯に、ただ伝える。

「俺は……鶯に会いたかっただけ……みたいだ」

その時自身が拙く微笑んでいたことも、キラは気が付いていなかった。

こうした時間の後は、時雨の時空とこの世界で、その後激動の数カ月の出来事に大きな違いはない。

それなのに、この世界でやがて、鶯の前に降り立つ青年は、銀色の髪で金色の目の時雨とは似ても似つかぬ姿で……――

「――改めて宣告するけど。オレはアンタを狩りにきたんだ。魔剣『<sup>あまつぼめ</sup>雨燕』」  
「……………」

この世界の己、「燕雨」と名乗る金色の髪で蒼の目の少年。それを前に、時雨は冷淡かつ爽やかな笑顔で、軽く言い切っていた。

対する燕雨は、袖の無い黒燕尾の長い上着を風に揺らしながら、時雨と同じ黒いバンダナを巻く腕を組み、ううん、と首をひねる。

燕雨が不可解そうにするのも、無理のないことだった。

少し前に突然「己の力の残滓」と言われる者が現れ、大切に想っていた娘の鶯に手を出そうとするので、燕雨はある事情でこもっていた天の島を離れた。そうして鶯を守りに、花の御所へ舞い降りたのだ。

それから何度も、燕雨は時雨を追い払い、幾許かの時が過ぎた頃に――

月明かりが照らす古都の一角、古い木造の橋の上で。またしても不意に現れた時雨に、燕雨はそもそもの疑問を投げかけていた。

「……オマエ、さ。本当に――俺？」

互いに同じ疑問を持つ辺りは、やはり同一の起源を持つ存在らしい。

夜の闇を纏う時雨とは違い、青白い月光の映える燕雨は、声色も姿勢も飄々としている。常に「悪神」の翼から起こる吐き気に耐える時雨より、余程余裕があった。

「違う時空から来たっていうけど……同じ奴が二人、存在できるのか？」

時雨と同等――もしくはそれ以上の現状把握能力を持つらしい燕雨は、嫌味なほどに的確な問いを口にする。



過去や未来。中でも禁忌とされる並行した時空を渡る者にとって、本来「その時空の己」との折衝ほど、難儀な問題はない。それは何故なら――

「できないよ。オレがオレである以上、どこの時空でも、そこにいるオレの身を通さないと本来動けないから」

生半可なことでは、時空の転轍――歴史の改変を起こされないために、世界にはそもそもそんな防衛原理がある。

渡る先の時空に自分自身が在れば、そちらが優先される。己に同化し、影から操るような形でしか、世界に干渉はできなくなっている。

それじゃあ、と得心したように、燕雨が軽快に頷いていた。

「オマエには、俺を操れなかった……憑けなかったってこと？」

だから同じ少年が二人、この場にいることになった。その意味を時雨は酷薄に、機械のような金気の眼差しで告げる。

「それだけオレとアンタは異質で――アンタは、不秩序な存在ってこと」

そんな化け物は討伐対象でしかない。それが彼らを取り巻く現状だった。

……何で？ と。動揺した様子もなく、ただ不思議そうに尋ねる燕雨に、神殺しの「悪神」となった時雨は舌だけを打つ。

全く構わない燕雨は、これまで大きな苦も無く追い払ってきた時雨に、特に脅威を感じていないようだった。

そしてよりによって、時雨の神経を一番逆撫でする問いを発する。

「何でそんなこと、しなきゃ駄目なんだ？ オマエ」

……どうしてそれが、そんなに癪に障ったか、時雨もわからなかった。

「……何で……って」

秩序を乱す化け物、破綻した「神」を狩る――それは元々、時雨よりも以前に「悪神」を宿していた乙女、ある黒い鳥が負っていた役目だ。

「それがオレの仕事で……『悪いこと』、だからさ」

時雨は結果的に、その役目を引き継いだことになる。

しかし「悪神」とは関係なしに、自身の都合でその役割を果たしていた黒い鳥と、時雨が神殺しをしている理由は全くもって違った。

「ヒトの命運を変える『神』なんて化け物を……オレが先に、破綻させて潰してやるんだよ」

時雨の声に霜が降りた。歪んだ視線が燕雨に向かって凍り付く。

それでも淡々と、燕雨は時雨の矛盾を曝け出す。

「俺は別に、『神』じゃないけど？」

「神」の力を纏う時雨のような神徒や、類縁である鬼や妖、威光をかぎす天使に悪魔。時雨が狩ることを許された化け物の範囲は、相当に広い。

しかし燕雨はおそらく、そのどれにも該当しない。ひたすら中途半端な化け物であることを、時雨もそれまでの関わりでわかっていた。

「……だからだよ。アンタは曖昧過ぎて、不秩序で気持ちが悪い」

「そういうのって、言いがかりって言わないか」

「だったら……何だよ？」

この討伐が八つ当たりであることなど、時雨はとっくにわかっていた。

「オレはアンタが……——凄くキライで、殺したいんだ」

それどころか、時雨の神殺しのほとんどは、彼が仕組んだ罠と言える。

「悪神」の導くままに、様々な化け物をわざわざ不秩序の方向へたばかり、それで相手が破綻すれば葬るのだから。

「……そっか。それは——仕方ないな」

燕雨は観念したのか、時雨の持つ神剣「時知雨」と元は全く同じ——

しかしこの世界ではある悪魔の「力」を受け、魔剣と化した「雨燕」を、静かに鞘無しで具現する。

彼らにとって、剣をとる行動はたった一つの意味を持つ。

追い払うだけだった時雨と、燕雨はやっと殺し合ってくれるらしい。

しかし時雨に、こんな街中で派手に戦う気など、当初から無かった。

「もう一度、『天龍』に來いよ——燕雨」

「——え？」

怪訝な顔をする燕雨に、時雨はいつも通りのあくどい微笑みを浮かべる。

「トウカに呼ばれて、それで天から降りて來たんだろ。オレを止めろって」

時雨と同行している少女のこと。彼らの拠点「天龍」——雨雲に扮する闇の船へ、燕雨は訪れたことがあるはずだと看破する。

あまりに迅速に、鵜を守りに現れていた燕雨——その理由として時雨はあっさりと、身内の内通を察していた。

「アンタは『天龍』を見つけれられて、トウカと関われる神性を持つてる。それだけでも、オレがアンタを殺すことは正当化されるんだよ？」

そこで時雨は、堪え難い悦楽を零すように、目端を強く歪めて嗤う。

「……どんな方法を、使ってもさ」

自らに有利な場に移るために、時雨が思い浮かべたことを、その直観で感じたらしい。燕雨の顔付きに初めて険しさが宿った。

「鵜を——そそのかしたのか……！」

「——オレは、別に？ トウカが勝手に、鵜を『天龍』に連れ込んだだけ」

敏腕術師である鵜は時雨の現状を占い、その余波で時の闇に在る桃花に出会ってしまったと観えた。

桃花の思惑はわからなかったが、彼らの拠点の古代船に鵜は禁術を使い訪れていた。その事態が時雨を動かし、燕雨の前に降り立たせた。

「今度は誰も、道を教えてやらないけど……ツグミを助けに来てみるよ？」

「——……！」

時雨の棲む闇と、この世界の連絡橋である「天龍」は、本来そう簡単に到達できる船ではない。燕雨がそこに辿り着く前に、時雨は鵜をどうするつもりであるのか。

燕雨はそこで、時雨の危機的変質を悟ったのか、声にも緊迫が混じる。

「違う——鵜は関係ないだろ、時雨……！」

思わず時雨そのものを掴もうとし、投げ出された手が空を切る。

闇に溶けていく時雨は、大きく焦る燕雨に満足そうに嗤った。

「往きは良く、帰りは怖く……『神隠し』にご注意を——……」

……時雨という少年が以前の己を失った、神殺しによる「神」の憑蝕。

それを本来の「神隠し」ということを、燕雨が知るわけではなかった。

闇から闇へ、その移動は、最初の時空越えと違って一瞬で遂げられる。

「今晚は……何で、こんな所にいるの？ ……——ツグミ」

「……！」

よりによって桃花は、時雨の最も深い闇の船底に、鵜を閉じ込めていた。

「時雨……——」

強気な彼女には珍しく、必死に堪える涙で鵜が両目を潤ませている。

黒い翼を閉じて悪戯に嗤う時雨を、震える大きな黒い瞳で見つめていた。

\*

何言ってるのよ！ と。

三年前、鶯にただ会いたかった、とやって来た銀色の髪少年に、鶯は真っ赤な顔を隠すように、少年を手拭いで激しく拭きながら丸め込んだ。

——だからって雨の中来ないの！ 風邪ひくでしょ！ 来てもいいけど！

混乱したらしい鶯は、それなら自分が行く、などとも口走っていた。

それが少年はとても温かく、嬉しかったことを、時雨は知らなかった。

だからまさか、鶯が自ら「天龍」に来るなど、時雨自身想定外だった。

どうやら桃花の差し金らしいが、理由など聞く気にもなれなかった。

古のカラクリ大蛇の胎内で、ここまで来てしまった鶯と時雨は対峙する。

冷たい頬を、温かい何か伝う。それが何かも、時雨にはわからず……闇の中で強く動揺していた鶯は、時雨の声に気を奮い立たせていた。

「……時雨。……アナタはちゃんと、アナタの世界に帰って」

それをわざわざ、言いに来たらしい。そんな鶯に時雨はぎこちなく笑う。

「それは……………無理だよ」

この暗闇がその理由。鶯は絶望の淵を見て尚、そのように言うのか——

「——だって……オレは——……」

そんなやり取りが、たった半時前の出来事。

燕雨がその名の如く最速で、古の暗雲に飛び込んで来た時には……——

あまりにあっさり、そこに広がっていたのは——きっと地獄以上の光景。

闇の蛇の胎内で、時雨の足下に転がる誰かに、燕雨は声を失っていた。

「つ、ぐ……み……？」

永い約束の黒い翼が、「悪神」という不滅を背負う少年を包み——

止むことのない時の雨という、果てしない慟哭へとやがて誘う。

「死ん……で、る……？」

「……………」

きっともう、時雨はとっくの昔に、正気など失っている。  
この光景を見ても崩れ落ちない燕雨も、何かが相当壊れているが.....。

暗闇に確かに、静かに横たわる赤い影は、紛れもなく鶯という名を持つ娘だったもの。  
不思議なくらい安らかな顔で、冷え切って固まった手足は、それがもう決して動かない亡骸であることを示す。

「時雨——.....オ、マエ.....！」

鶯の状態を確かめ、両膝をついていた燕雨が、手にする魔剣を血が滲むほど握り締めた。そのまま顔を上げて、時雨の方を見た時の気迫は——

「何でオマエ——.....こんな、こと.....——！」

.....これは本当に、誰なんだろう。

燕雨が来る前から呆けていた時雨は、反射的に神剣を手にしながらも、思うのはそんな空虚な違和感だけだった。

激しい感情で両眼を濁しながら、それでも尚、己を失わない燕雨に——

急　　ツバメが低く飛ぶと雨が降るー



精神的な強靭さだけではなく、体の鍛えられ方も、武技も力の使い方も、燕雨は全面的に時雨を上回っていた。

そのためこれまで、時雨はほとんど鶴に近寄れないままだった。

どちらにも「刃の精霊」が存在するため、互いの力を消し合ってしまう。少年と青年は純粋に剣技だけで、暗闇の中でしのぎを削る。

「こんなこと——もうやめろよ！　時雨！」

「.....——」

この期に及んでそんな甘いことを口にする燕雨に、時雨は呆れる。

確かに強さは燕雨が上だが、燕雨がもしも時雨を殺せば、今度は燕雨が「神殺し」となる。その呪縛を渡せるなら願ってもない。

殺せないなら、燕雨を殺す気である時雨にいつかは好機がある。燕雨は防戦を続けるしか活路のない点で、時雨より不利なのだ。

現状を把握する直観の持ち主同士、ほとんど光の無い場所でも、彼らは相手を見失うことがない。

しかし度々、何かに躓いて片方が体勢を崩し、その都度剣閃を受ける。

生きている何かの妨害であれば、どちらにも感じ取ることができるはずだが、この妨げこそが地獄と、息せき切る少年達は気が付いていた。

そうして受けた傷が、双方洒落にならなくなってきた頃に――

何で？ と、またも、燕雨が無駄な問いかけをする。

それも時雨の逆鱗に触れることを、罅迫り合いのさなかに問う始末だった。

「何でオマエは――……俺のこと、嫌うんだ？」

「……――は？」

「俺は別に、オマエのこと、嫌いじゃないのに」

そのあまりの燕雨の平和さに、時雨は呆気にとられる。

金色と銀色に分かれる前の少年が、今まで一度も少年自身を好きだったことなどない。自身の軌跡を辿った時雨は知っている。

寧ろ殺したいほどの己への憎悪で、茨の道を突き進んでいたというのに。

「何……言ってるんだ、アンタは――……」

黒い鳥を助け、「悪神」を引き受けたのも同じ理由だ。

銀色の髪の少年は、黒い鳥の力にならない自分を許せなかった。

「『俺』のくせにそんなこと――……言ってるじゃねえよっつ……！」

それで不変の責苦――永遠の翼を受けることは、わかっていただろうに。

あまりの憎悪に、殺意すら飛ぶ。振り切った剣を弾き飛ばされた時雨は、そのまま袈裟懸けに、深い一手を肩口から受けた。込み上げる血と共に、瘦身が崩れ落ち、臓腑から溢れた金色の髪の青年への怨嗟を嘔吐する。

「っつあ……う、――……！」

獣のように身を伏して這いながら、幾度も背骨を蠢かせては激しく喘ぐ。

……殺したいほど、その金色の髪が憎かった。だから少年は「時雨」を選んだ。

「神」に隠された「銀色」は一人で、闇路を選んでしまったから……。

……淋しいか、と、黒い少女は、最初に少年を見た時に尋ねた。

「アナタの依り代は消えたの、シグレ」

金色の髪の少年は、何も答えられなかった。

少年の本体――「銀色」の心と記憶が全て消えてしまい、自分が何者かわからなかったからだ。

「意識は残っているのね。良かった」

そう、だからそれだけはわかった。金色の髪の少年は……「銀色」に、置き去りにされたことを。

それでも「時雨」の名を求め、「雨」の加護を手に入れることで、少年の金色の髪は銀色に変わった。残された抜け殻の面影は消えた。

——……私の『力』が、欲しいの？ ……ユーオン君。

事切れながらその変貌を見届けた雨女は、金色の髪の少年だった者へ、哀しげな微笑みだけを遺す。

——キラ師匠は勝手でしたよね。……師匠。

不意に、常に手放さないソレ——雨女の恋人だった「刃の精霊」から、這いつくばっている時雨に、滅多に発さない声かけられていた。

——師匠の気持ち、わかりますよ。オレも今でも怒ってます。

「……………」

——オレ達を残して、勝手に一人で消えちゃいましたからね。

本来は情など薄いソレに、そこまで言わせる誰かの末路。

時雨は初めて、目覚めた時から己を占める心の正体を知る。

「……そっか。……オレ……………怒って、た、んだ」

その「悪神」に手を出せば、脆弱な銀色の心は暗中に消える。

わかりきっていたことなのに、どうしてキラという少年は、自らよりも「悪神」に崇められた黒い鳥の安息を選んだのだろうか？

待っているから。そう伝えてくれた、赤い小鳥がいたのに。

キラよりも簡単に消えられた、もう一人の彼——ユーオンもいたのに。

「ツグミを好きだったのは……オレじゃなくて、俺<sup>キラ</sup>なのに」

ユーオンはキラを真似ていただけで、キラの憧憬した黒い鳥を知らない。だからキラは己の願いに、もう一人の彼を巻き込まなかった。

むしろ彼にその約束を託し——自らだけで「悪神」を斬った。

「それなら、オレは……オレの方が、消えたかったんだ……………」

もう彼にはその真似ができない。消えたキラと同じになれない。

消え残る自分を呪いながら、彼はキラの生きた軌跡を辿る。

けれどもこの時空では、あの有り得ない相手が存在していた。

彼はそれをわかっていたかどうか。あの燕雨という青年は、本当は——



「……………」

暗闇でひたすら、黒い血反吐を吐き続ける時雨に、燕雨は剣を下ろす。

ようやく慣れてきた目で周囲を見回すと、そういうことか、と哀しげに時雨を見つめる。そして素直な想いを、そこで声にしていた。

え……？ と。四肢をつく時雨が、呆然と燕雨を見上げた。

「だから……ごめん」

燕雨も片膝をつくとき、もう謝れない者に代わり、静かに続ける。

「勝手をして、ごめん。『俺』は多分……そう思ってるよ」

時雨の向ける果てしない敵意の理由を、今の燕雨はわかっていた。

「オマエは元々、オレが嫌い……その上俺に、文句を言いたくて。それでこんな所まで来たんだろ」

関わらないと決めた鶯によりも、燕雨にこそ、時雨は会いに来たのだ。不思議なくらい穏やかに、燕雨が時雨の金色の目を遠く覗き込む。

「だからもう……鶯を巻き込むな」

燕雨のその、青く光る蒼の目の深奥が、時雨の金工の神眼に映る。

初めて時雨にも、燕雨という青年の真の形がおぼろげに伝わる。

燕雨は自身の傷をバンダナで止血しつつ、もう一度暗闇の船底を見回した。揺れる髪が暗黒の中、ふっと、白銀に煌めいたように時雨には見えた。

「ここにいる鶯は……いや、『鶯達』は……いったい何なんだ？ 時雨」

「……………」

時雨と燕雨が戦っている間に、何度も躓いた障害物の正体。

いくつも転がっている、鶯という娘。若い乙女だけでなく、女から老婆まで様々な遺体を、燕雨がきつくしかめた目で見渡す。

「この世界の鶯には、何もしてないだろ、オマエ」

「……………」

燕雨がこの場所に辿り着く前に、鶇は様々な年齢の、自分自身の死体が山と転がる地獄に来てしまった。そんな鶇を、時雨は僅かな言葉を交した後に、意識を奪って桃花に預けてあった。

気丈な鶇が涙するのも無理のない惨状に、燕雨は淡々と続ける。  
「この鶇は、多分全部.....オマエが色んな時空で集めた鶇。違うか？」  
明敏な燕雨に、時雨は上体を起こし、一際深い肩の斬り傷を押えながらぺたんと座り込む。俯いて昏く嗤いながら、そうだよ、とあっさり答えた。  
「時空ってやつは.....気が遠くなるくらい、無数だから」  
「.....」  
「鶇が早死にしたり、誰かを待ったまま一人で死んだり.....そんな世界も、ごまんとあるわけだし」

「悪神」の翼を得て、死の遠い存在となってから、時雨は克己を捨てた。自覚した望みは清濁構わず貪っている。  
何が一番時雨に、己が時空に帰ることを拒ませたか.....彼自身の世界で最も見たくない一つの現実。両目から熱い哀願が零れた。

「鶇もいつか——.....オレの世界でも、必ず.....先に死ぬんだ」

その時間を進めてしまうよりも、永遠に逃げ続けることを彼は選ぶ。

それじゃあ、と燕雨は、至って真っ当に、狂気の相手に引き続き尋ねた。  
「どうしてここにわざわざ、色んな時空で死んだ鶇を集めてるんだ？」  
「.....ここには、時間が流れないから」

どの時空であろうと、時雨にとって、鶇という存在がいなくなることは——たとえ見ているだけでも、ひたすら耐え難かった。  
「魂も命も、何もないけど.....ここにいれば、鶇の体は永遠に消えない」  
「.....」  
「トウカは鶇を、オレと同じ神にしろと言うけど.....オレはそんなの.....絶対に嫌だ」  
空ろな目つきで呟く時雨に、燕雨は一度だけ、大きな溜め息をつく。

「.....こんなこと、やめろよ.....鶇の死に慣れるのは、絶対に無理だ」  
「——.....」

「その翼を切れ。それだけでオマエは、不滅の存在なんかじゃなくなる」  
燕雨の見立ては、やはり憎らしいほどに適切だった。

「悪神」を宿す翼、そんなものを背負わんとするから、全ての苦しみは生まれるのだと。

その答は、当初の選択、「シグレを殺す」に含まれたもう一つの道。

残された己の自我を手放すか、それとも——「悪神」に隠されて消えた銀色の髪の少年を、翼ごと手放すか、その二択を意味していた。

初めの桃花の声を思い出した時雨は、虚を突かれたように考え込んだ。しばらくしてから、嘲りを捨てた笑みで、目を逸らして拙くうそぶいた。

「.....それができたら.....アンタに喧嘩なんか、売りに来ない」

「.....」

鶯を奪えという「悪神」の囁きは、もう時雨には聞こえてこなかった。

「悪神」の願いと、自身の願いを混同している.....最初の桃花の忠告は、そういうことだったのだろう。

時雨は結局の所、神隠しにあった銀色の髪の少年を諦められないのだ。その少年を呼び覚ませないかと、鶯への思慕まで煽ってみるほどに。

彼らはいずれも、自分自身のことは、長い憎悪の果てに見放している。

けれど金色と銀色、同じでありながら違う少年は互いを嫌わず、己より大切な相手として認め合っていた。

「.....ツグミが待ってるのは、シグレじゃないから」

時雨の世界で、鶯がその心を伝えたのは銀色の髪の少年だ。

時雨自身は「銀色」の真似をしていた、その仕方すら失った抜け殻——

「.....帰れよ。ツグミを連れて、さっさと地上に」

「.....」

燕雨は黙って、自ら暗黒に留まると決めた時雨に、背を向けたのだった。

— epilogue —

If I were you, a bird....

I'd wear my heart  
on my sleeve....

Cry

燕雨が鶯を探しに場を離れ、かなり時間がたってから、全身傷だらけの時雨は寝床の管制台に戻ってきていた。

「お帰りなさい、時雨」

「……………」

彼が寝そべるはずの長椅子には、桃花が小さく座って待っていた。

色々陰で動きながら悪びれない相手の隣に、時雨は気怠く座る。

「あの彼の中の——『銀色』には会えた？」

時雨が燕雨を見咎めた本質を、桃花はとっくに見抜いていたらしい。

「……やっぱりトウカは、性格、サイテー」

その目敏さが忌々しく、不意に時雨の心臓が黙った。一瞬で桃花の腕を掴み、あちこち赤まみれの体で、狭くて硬い座面に荒々しく押し倒した。

「……——……」

両手の間から、無垢に時雨を見上げる桃花は、屍骸の鶯を彷彿とさせる無感情さ。嗜虐にかられた彼の情火を、いとも簡単に消し止めていく。

この過小な尊厳を蹂躪したところで、悦ぶのは「悪神」だけなのだろう。すぐに興が冷め、小さな総身を組み伏せたまま、動くことができなかった。

漆黒の目をじっと時雨に向けて、静謐の中で固まっていた桃花は——

「抵抗……しないで、いいのに」

ぼつりと呟いた桃花の声が、いつになく哀しげに響く。

「時雨が『悪神』になれば……時雨も私に、混ぜるだけだから」

どうやら今回、桃花は本気で、それを覚悟していたようだった。

これまで幾つもの命——「力」や「神」の陰に、桃花は管理する混沌と共に隠れていたらしい。太古に「悪神」と近い起源から分かれ、隠れ先の命を真似る空ろな夜影。今の桃花は、時雨と出会った光の娘を映した影だ。

キラだった頃に、時雨は亡き縁者の残滓の赤い鼓動を引き受けていた。その縁者に愛された桃花は、時雨に想い人の影をずっと重ねている。

「……何でオレが、あんたに喰われなきゃいけないんだ」

その時が来れば、桃花もまた、混沌の内に消えるのだろう。

時雨を利用し続ける桃花に、簡単に安息を与える気はなかった。

彼にとって桃花の存在は、鶯の不在を紛らわし、鶯を守るためのもの。

しかし今も亡き相手を想うはずの桃花は、鶯を模して長かった髪を切るなど、時雨の望む姿を映そうとする。その真意はよくわからなかった。

彼を取り込み桃花が混沌に戻っても、別に困るはずのない自身の矛盾も。

時雨のそうした、あまりの無自覚さに、桃花が小さな溜め息だけをつく。

そのまま両手を時雨の首に回し、珍しく強引に抱き寄せてきた。  
「……？」  
お互い、誰かの影を求めているだけの関係に、時雨には違和感しかない。

「……——ここに、いて」  
甘ったるい声を醸す桃花の薄い唇が、燕雨に斬られた肩の傷口を食む。硬い寝床の椅子で抱き合ったまま、赤い鼓動を吸い上げて同調していく。  
「……や、め——……桃、——……」  
生色を奪われる少年は、かすかな休息へ、やがて目を閉じていった。

Cx/SCR: 雨燕と時知雨

-a Swallow-made Chronic Rain- 了



rewrite:2020.5.10

\* 奥付 \*

[雨燕と時知雨 ※本作]

(<https://puboo.jp/book/112782>)

[雀の涙 ※ 2022/12/24 公開予定・本作の完全版]

(<https://puboo.jp/book/134399>)

[著者 : pierrette\*\*\* twitter@kazari\_sou]

(<https://puboo.jp/users/sky-lux/profile>)



---

雨燕と時知雨

---

著     pierrette\*\*

制 作   Puboo  
発行所   デザインエッグ株式会社

---